
殺しはひとのためならず

青山丈夫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

殺しはひとのためならず

【Nコード】

N9424H

【作者名】

青山丈夫

【あらすじ】

どこにでもいるような高校生、間馬桐斗。彼と彼を取り巻く世界は今日も平常な時間のまま経過していく。しかし、彼には秘密の一面があった。それは学校のだれにも知られない部分である。しかし、それが彼の本当の姿であった…

序

序…学校にて

授業中、窓辺の席の人はいったい一日どれくらいの割合外を見ていることだろう。

僕は8割は外を見ている自信がある。

ぼーっと外を眺めながら、無意味、無秩序、無責任なことを考えるのが好きだ。

今は、人の命の軽さを考えてた。

人の命って、なんて軽さだろう。人の命を蠟燭の火に例えた人は、とても賢い人だと思う。蠟が無くなれば火は消える。蠟があっても、息を吹きかけられたり、風が吹いたりすればまた、消える。大半は、後者によって火は消えてしまう。人の命もそんなところ。

僕だって、殺される運命にある。殺す運命にあるからだ。どう転んでも蠟が消えるまで生きているなんて事はできないだろう。

学校が終わるまで、僕はひたすらそんなことを考えていた。

学校が終わると、誰に話しかけるでもなく、部活に行くでもなく、すぐに校内から出た。

今日は御遣いを頼まれていたからだ。

「間馬^{あいば}くん！」

後ろから呼び止められた。この声のトーンの高さ、そして僕におせつかいを焼く人物、見ないでもわかる。末瀬^{すえせ}真実^{まなみ}だろう。

「間馬くん！呼んでるのが聞こえないの！」

僕は、やれやれ、と、面倒くさそうに振り向くしかなかった。案の定だった、が、末瀬は肩で息をしていて、よっぽど焦って走ってきたというのが見てとれる。 magari なりにも、悪い気がしてしまった。

「どうしたの、末瀬さん？」

「どうしたもこうしたも無いでしょ！今日の当番、間馬くんでしょ？朝ちゃんと言ったの忘れたの？」

ああ、そういえばそうだったような気も…。

「ごめん、忘れてた。でも、今日用事があるから、末瀬さん、やっておいてくれない？」

「そう来ると思ってたわ。ふう、いいわ、やっておいてあげる。でもこれでまた貸し一つね。どうやって返してもらうか、わかってるわよね？」

末瀬はぐっと顔を寄せてきた。わかっている。昼のパン代だろう。

この末瀬というやつは、級長という肩書きを持っているが、見た目・性格も級長という、僕なんかにしていわせればとても面倒くさいやつだ。でも、真っ直ぐで責任感が強いせい、か、生徒の間からも

教師の間からも好かれているらしい。おまけにこのルックスなんだから、ファンがいてもおかしくはないことだろう。そのくせ僕にはこんな恐喝じみたことをしてくる。学校のやつに我がクラスの級長の実態を赤裸々に明かしたいところだが、僕が当番をサボったことがばれるといけないので黙っておく。

「ああ、じゃあ今度おごるから、それで勘弁してもらえるかな？」
「今度？明日に決まってるでしょ！どうせ間馬くんすぐ忘れるんだから。そのうち私も忘れちゃうわよ」

僕はくると首を回し、空を仰いだ。

「明日土曜日…」

末瀬は、あっ、という顔をして若干恥ずかしそうにしているように見えたが、思案にくれた後、そんなことなかったかのように開き直ってこっちを見てきた。見ていると面白いな。

「あ、明日って言ったら明日に決まってるじゃない！いいわね、きっちりおごってもらうわよ、あ・し・た・に！じゃあ、明日の昼に校門で！」

言うがはやいか動くがはやいか、末瀬は学校へ走っていった。しまった。

なんて騒がしいやつなんだ、と思った後、どうやらいつの間にかデートの約束を取り付けられてしまっていることに気づいた。

なんだか自分の体は素直に喜べと言っているらしい。

ただ昼のパン代より高くつきそうで、そこだけがネックであった。

馬鹿みたいなやりとりで時間を使いすぎたせいかな、日が傾きはじめた。

僕は気持ちを切り替えると、再び歩を進めだした。
御遣いに行かなければいけないからだ。父さんから頼まれた御遣い。

大事な御遣い。

僕の御遣いとは、○×商事の田丸雪藤^{たまるゆきふじ}を殺すことだ。

学校の誰にも知られていない事実、僕の家は殺し屋なのである。

第一章：月夜

1章 月夜

日はすでに沈んでいる。

静かだ。都会の喧騒とは全く隔絶されている空間。

田丸の家は郊外のさらに辺境の場所にある。移動するだけでもかなりの時間を要してしまった。だが、問題はない。ほぼ予定通り。田丸の帰宅時間は調べてある。まだまだ時間はある。

しかし今日は、本当に、殺しをするにはちょうどいい日かもしれない。

闇空を厚い雲がすべて覆っている。月や星の光が全く届いてこないような、そんな気にさせる。この辺境の場所もあいまって、街灯の光がなかったら何も見えないんじゃないだろうか。

街灯の光を頼りに歩いていくと、まもなく田丸の家に着いた。

一度下見に来たことがあるから、特には驚かなかった。田丸の家は、場所に不釣り合いな、豪壮な邸宅である。僕の家よりも下手すると大きいかな。

田丸雪藤。○×商事における重役であり、相当の切れ者と評判高い。妻子もちである。その他にも多くの情報が入っているが、この人物は特に悪事に手を染めたことがないという。それは公になっていないということではなく、本来的にしていないという意味である。また、この人物に恨みを持つという者もない。逆に、尊敬する人

物は多く、誰からも親しまれているというのだ。

本来であればこのような人物を殺すいわれはない。しかし、本来でないために、殺す必要がでてしまった。まったく、面倒くさいことである。

僕はため息をつきながら、田丸の屋敷に入ってしまった。外は冷えるため、中で待つためである。寒いのは苦手だ。

正門から堂々と敷地内に入り、堂々とキッチンの窓を割って、屋敷内に侵入した。

屋敷内には誰もいなかった。

ここへ来るまで長い距離歩かされて、のども渴いていたので、飲み物をいただくことにした。冷蔵庫にはさまざまな飲み物が入っていた。さすがにアルコールはやめておくか…。

僕は冷凍庫から氷を取り出し、アイスピックで砕いてからグラスに入れた。そしてジュースを注ぎ、一気に飲み干した。

それにしても、運動した後の一杯は格別にうまいな。これは大人も子どもも変わらない真理の感覚だと思っている。僕はまたグラスに注ぎ込んだ。

田丸が帰ってくるまで暇だったので、リビングでテレビを見ながら待っていた。

1時間ほどたった時だった。

ガチャ。玄関の扉が開く音。：やっと来たか。

テーブルにあるグラスには、氷が解けて水だけが残っていた。それを一気に飲み干した。そしてテレビを消し、制服の乱れを正した。ここからは、本格的な仕事モードである、と自分に言い聞かせるように。

「！」

「お疲れ様です」

「何だ君は…。まさか、君が私にあの手紙を？」

「ええ。読んでいただけたようで、何よりです。かいつまんで説明いたしますと、あなたにはこの場で死んでいただきます。何か質問などありますか？」

「じよ、冗談じゃない！私が何をしたっていうんだ。殺されるいわれはない。だいたい君はどこから入ってきたのだね？これは明らかに犯罪だ！早急に出て行ってくれ！さもなきゃ、警察に通報するぞ！」

「へえ、もうしてたんだと思ってたんですけど。違ったんですか」「えっ？」

僕はくすりと笑った。本当におかしかったからだ。

「残念ですが、警察は来ませんよ」

「な、何を言っている！」

田丸はポケットから携帯を取り出し、すぐに電話をかけた。おそらく110だろう。

「怪しいやつが家の中に侵入してきた！すぐに来てくれ！場所は…」

田丸は警察にすべて伝えたとき、持っていた携帯をしまった。

「ふ、ふん。警察はすぐに来るぞ。高校生風情が調子に乗りおって。住居不法侵入に脅迫！しばらく塀の中で暮らすんだな！それが嫌ならとっと逃げるんだな、ふはっはっは！」

僕は、相手にもわかるくらい声を出して笑ってしまった。本当に、この人がおかしなことを何度も言うからだ。

「ふふふ。いいでしょう。警察は来るものとして、来るまでお話しようじゃないですか」

僕はソファ―に腰を落とした。

「どうぞおかけください。先ほど、『殺されるいわれはない』とおっしゃっていられましたが、その辺についてお話ししましょうか。もちろん、あなたには身に覚えがあるもんだと確信していますがね」

「ぐっ…」

「どうしたんです？警察が来るのなら何も心配はいりません。それとも立っていた方がいいんですか？それならそれでもいいと思います。でも、そこから一步でも逃げようとすれば…」

「…？」

「僕が何をするかわかりません」

田丸の顔が青ざめていくのが分かったが、田丸の態度は強気だった。その無理に平然と装っている様子が、とめどもなくおかしかった。田丸は自分とはテーブルを挟んで反対側のソファ―にどかっと腰を下ろした。

「仕方ない…、余興だと思って聞いてやろう。さっき君は私を殺す理由があると言った…。それが何なのか、言えるものなら言ってみなさい…！」

田丸は開き直ったようだな。

「分かりました。それでは、まず僕の質問にいくつか答えていただ

きます。田丸さんは奥さんとお子さんがいらっしゃったと思います
が、今はいらっしゃらないようですね。…いったいどうされたんで
すか？この時間にはいつもいらっしゃるはず…」

「な、なぜそれをしてる？」

「質問をしているのは僕です。もう一度繰り返しましょうか？」

「くっ、…妻と娘は二人で海外に旅行に行った。そう、イギリスだ。
しばらく帰ってこない…」

ほう。

「では、次に、なぜあなたは屋敷のセキュリティーを解除したの
ですか？」

田丸がはつとして僕のほうを見ている。それは驚きと恐怖が半々
を占めているような目だった。非常に人間味を感じさせるな、この
人は。

「あなたは、三日前の午前11時正式にセキュリティー会社との契
約を解除し、屋敷内のセキュリティーを解いた。おかげで僕は楽に
お宅に上がらせてもらいました。全くの無用心。なにか、理由があ
るんでしょう？」

「ち、違う！」

「説明が少々大雑把過ぎましたね。正確に言えば、11月26日の
午前11時6分にセキュリティー会社『セフティ』との契約を解除
する書類を提出した、ですね」

田丸は追い詰められた表情を見せるが、かろうじて平静を保って
いるようだった。

「…そう、その会社が信用ならないから、別のところにしようとし

たんだ！だから一時的に解除しているんだ！何もおかしくないだろう」

ふふ。苦しい苦しい。

「じゃあ、最後の質問です。なぜさっき警察に連絡しなかったんですか？」

田丸の表情の動きが止まる。

「もう一度言います。さっき警察に連絡しなかったのはどうしてですか？」

「…な、なにを言っている。私はちゃんと警察を…」

「呼んでないです」

僕はふう、とため息をついてから、続けた。

「あなたがセキュリティを解除させたのは、あなた自身がこのセキュリティ自体良く分からなかったから。警察を呼ばなかったのは、この家を警察に調べられなくなかったから。違いますか？」

「は、はったりを言うな！根拠がないだろう！警察も…すぐ来る…、だから、逃げるんならいまのうちだぞ！」

「根拠？必要ありません。結果として出ているんですから。それよりも…」

がん！

テーブルが勢いよくはねる。体よくひっくりかえった。蹴った。蹴り上げたのだ。

反対にいるやつをにらむ。

「俺はシラきるやつが大嫌いなんだよ」

「ひっ…！」

田丸はいよいよ平静を保てなくなった。

「あ、そうそう。ちなみに地下にあった親子の遺体はこちらで処分しました。奥さんと娘さん、それから、田丸氏の遺体をね。ではお話はここまでです。本題に移りましょうか」

「っ…！くそ！ふざけるなあああ！」

そいつはついに逆上した。そして、胸元に手を突っ込んだ。あちやあ、飛び道具か。もう少し穏便にしたかったんだけどな。

銃声が響く。

僕はそいつの体重を支えていた。

そして、耳元でささやく。

「ふふ、だめだよ2秒もかかったなあ」

僕はそいつを床に仰向けで寝かせてやった。

「それ、お返ししますね」

そいつの胸にはアイスピックが一本、突き立っている。

僕が刺したのだ。

そいつは死んでいる。

殺したことに相違はない。

一瞬、一発で相手の急所を正確に突く。

父さんに教わった技術。

これが僕に出来ること。

僕にしか出来ないこと。

僕にはこれしか出来ない、ということ。

仕事は終わった。

僕はそいつをそのままにして、帰り支度をした。

帰りはまたキッチンからにした。すこしジュースがうますぎたからだ。また冷蔵庫から取り出し、今度は氷なしでぐっと飲み干した。そして、僕は田丸邸を後にした。

すでに夜も深くなってしまった。しかし、来たときよりも明るく感じる。

ああ、月が出たからか。

闇を照らす月光を浴びた僕の姿は、あちらから見て、殺人者に映っただろうか。

そんな、無意味、無秩序、無責任なことを考えながら、僕は家路をたどっていった。

帰りたくもない、僕の家へ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9424h/>

殺しはひとのためならず

2010年10月11日01時25分発行